

殺し合いの戦争は決して許されない

吉田 ミキ (当時20歳)
江差町



私は広島陸軍病院に勤務し20歳の時に被爆しました。あれから70年にもなります。

私は放射能による様々な後遺症に苦しんできました。戦後間もなく骨髄機能障害で白血球、赤血球が著しく減少し、再生不良貧血となりました。当時の医師はそれが原爆によるものとは知らなかったため、私は適切な治療を受けることができませんでした。北大第三内科に入院した時、私は死を覚悟して入院しました。月々の主人の給料はほとんど入院費に支払われるため、自殺の方法まで考えたものです。

その後肝臓の機能にも障害があることがわかりました。さらに10年前には左乳がんの摘出手術を受け、6年前には肺がんのため入院し放射線治療を受けました。悪性甲状腺腫瘍もありますが、体力の老化で進行しないから墓場までもって行ってよいと医師から言われ、そのままにしています。30代からの両膝の変形性関節炎や最近の第2腰椎圧迫骨折等々を経て、今日まで必死に生きてきました。

その当時、私たちは銃後を守る隣組で、焼夷弾落下を想定してバケツに水を入れ消化する訓練をしたり、竹槍で敵兵の上陸を阻止する訓練に没頭していました。

8月6日、この日B29が突如として広島の上空を低空で飛行しても、迎え撃つ友軍機もない有様でした。アメリカ軍の狙い定めての一発は的中したわけです。先に凄まじい光線、耳をつんざくような大爆音、一瞬にして広島市街は地上に立ったままで一望に見渡せるほど破壊し尽されました。周辺に無傷の人は見当たらず、同僚も多数即死し、やがて傍らに積まれた死体は異臭を放ち、蠅も群がり、少し離れたところに大きな穴が掘られ、軍人も市民も区別なく焼かれていきました。

私は爆風で崩壊した建物もろともに空中に飛ばされ地面に落ちてしまいました。ガラガラ、ガチャン、ドスンと物の落ちる音が聞こえますが、ほぼ生き埋めの状態であたりは真っ暗です。でも頭にはコブ一つなくどこも打っていませんでした。手探りでわかったのですが、物と物とが支えあった三角の空間に座っていたのです。奇跡的に救助されましたが、黒い雨にも当たった私は、その後数々の後遺症に直面しながら、どうにかここまで生きて参りました。

年々風化されつつある戦争のむごさを後世の人々に伝えていかななくてはなりません。それが自分に課せられた使命と感じています。「非人道的な核戦争、化学兵器を使用した者は、その国の指導者は悪魔でありサタンである。よってこれを犯した者は悉く死刑に処すべきであろう」と言われた先人の雄姿がよみがえります。地球上の人類を滅亡させる恐ろしい武器弾薬は断じて製造しないで下さい。

近く開かれるという国連の核不拡散条約再検討会議において、戦争の悲惨さを一番味わった日本は声を大にして宣言してほしいものです。そして私たちのひと言ひと言が、国際会議の場において受けとめられ認められることを切望してやみません。